

話題提供 救急医は極地を目指す

¹ 昭和大学医学部救急医学

森川健太郎



日本南極地域観測隊は第一次隊が南極の東オングル島に昭和基地を建設し観測活動を開始して50年余が経つ。途中数年の中止を挟んで2010年現在第51次隊が観測活動を行っている。隊員の健康・疾病管理のため医療隊員が観測隊に参加し、最近では2名の隊員が採用され越冬を行っている。

医療隊員は、医療活動に従事する他に医学研究を行い、生物隊員がいない場合にはペンギンの個体数を調査するなど生物系の研究も行っている。また、医療隊員は観測活動を支える設営隊員として、他の部門の活動をサポートするなど、単なる医療活動の範疇に収まらない活動を現地で行っている。

昭和基地では、夏期間中は「しらせ」の医務官、前次隊の医療隊員と人数は越冬期間中に比べると豊富であるが、夏が終わり越冬期間に入ると越冬隊の2名の医師だけですべての医療活動を賄わなければならない。日本国内とはインテルサット回線を通じて遠隔医療システムが構築されており、問題が発生した場合には国内の専門医と相談できるようになっている。しかしながら、隣の基地が昭和基地から1000kmも離れた環境では、実際に問題を解決できるのは越冬している自分たちしかいない状況に置かれている。基地内の医務室ではレントゲン撮影が行える他、簡単な手術が行える程度の設備を有している。幸いにして、現在まで全身麻酔を必要とするほどの手術症例は行われておらず、死亡例はブリザードに遭難した隊員一名のみとなっている。

このような、診療所程度の設備はあるが、周りに頼れる人・設備もなく、そこで全ての問題に対処することを求められるということは、非常に心細いものがある。救急医こそ、このような環境で活動を行うのにうってつけではないかと考えられる。最近の南極観測における医療活動の様子を含め紹介する。